

フィラーとしての「ちょっと」について

The characteristics of “CHOTTO” as a filler.

小 出 慶 一*

KOIDE Keiichi

1 はじめに

1.1 本稿の目的

本稿が関心を持つのは、次のような「ちょっと」の用法である。統語的な位置づけが不安定なもので、フィラーと見ることができそうなものである。

1 1 : (…)^{注1} あの一、失礼ですけどご主人様は、どのようなその、例えば、ある、典型的な一日ですと、(2 : ええ) 何時頃お宅をお出になって何時頃お帰りになれるんでしょ？

2 : あ、そうですね、えー、昨日の場合ですと、(1 : はい) 朝、7時半頃出まして、会社は8時半からー(1 : はあー) なんです。それで、主人はちょっと^{注2}、こう設計関係の仕事なものですから、(1 : はい、はい、はい) 今締切り間近で、(1 : はい) 大体次の日に、帰ってまいります。(IT f)^{注3}

2 1 : ああそうですかー。じゃ、(2 : 一日) 田中さんは一週間どのくらい。

2 : 今のところちょっとあの一、研修生なんで、(1 : はい) 週に二回なんですけど、(1 : はい) これから週に、自分の好

きだけ入れれるし、(1 : はい) あと、時間も自分の好きなだけーなんで、(1 : うん) しんどいなあとか思った日には二時間とか。(RTm)

このような用法に対して、「ちょっと」には、量副詞、程度副詞、モダリティ副詞、感動詞(呼びかけ詞など)というような用法がある。内容については後述するとして、例を挙げれば、次のようなものである。

3 a (量副詞) 食後に、果物をちょっと食べた。

b (程度副詞) 今日は、ちょっと蒸し暑い。

c (モダリティ副詞) ちょっと待ってください。

d (感動詞) ちょっと、その人。

フィラーとの対比で言えば、これらの「ちょっと」は、ひとつの文の中に位置づけがされるもの、あるいは、それ単独で独自の機能を持つものである。

上の1、2の「ちょっと」は、どこにどのようなかかっているか、何を指しているかというようなことが決めにくい。1の「ちょっと」は、「設計関係の仕事なものですか」にかかるのか、「だいたい次の日に」なのか、「帰ってまいります」なのか、あるいは、そのどれでもないのか、

* こいで・けいいち

埼玉大学教養学部教授，日本語教育

定かではない。位置づけの定かではないものが現れるとは、どのように考えればいいのか。しかし、その一方で、3の用法と何らかのつながりも感じられる。もしそうだとしたら、どのようにつながりがあり、どのような機能を持つと考えればいいのか、このようなことの検討が、本稿の主たる目的である。

1.2 「ちょっと」のフィラー用法に関する先行研究

ここで、「ちょっと」の先行研究を簡単に見る。「ちょっと」という語のみをテーマにしたものは、ほとんどないようであるが、程度副詞を論じつつ「ちょっと」に触れたものは非常に多い。しかし、程度副詞以外の用法となると、その数は多くないのであるが、その中で早いものは、木村（1987）である。そこでは、モダリティ用法の「ちょっと」について次のように述べられている。

4. 相手に依頼する動作を短く少なめな形——一言わば「軽減化」した形——で提示することで、こちらの控え目な要求の姿勢を示し、それによって、より円滑な依頼行為の遂行を促す働きを担っている。(p.61)

この見方はその後の論者にも継承されている。依頼という対人行動で現れる背景には、このような「軽減化」があるとする論である。「ちょっと」の意味と機能を結びつけるとすれば、このような見方に落ち着くのもあながち不自然ではないが、この点については後の説で検討する。

そののち、「ちょっと」の、程度副詞以外の機能を扱った論文がいくつか現れた。

国立国語研究所（1991）は、「間つなぎ」という用語で呼んでいるが、次のような用法の「ちょっと」である。

5. ええ と、まあ、今日は休んで、ちょっと、あれしたい。(p.151)

「間つなぎ」という用語は、国立国語研究所の刊行物の用語では、いわゆるフィラーを指すものとして使われてきているもので、「ちょっと」のフィラー用法を取り上げた早い時期のものである。

また、周（1994）は、モダリティ用法を中心に分析を加えたものであるが、「ちょっと」の性質を次のように捉えている。

6. 「ちょっと」は、主に、話し手が聞き手に行為を求めるときに使われる。その行為によって、話し手と聞き手の間に利害が生じ、話し手にとっては利益に、聞き手にとっては不利益になると話し手が予想した時に用いられる。(p.177)

これがモダリティ副詞としての「ちょっと」の全体的な性格であり、下位の機能として、依頼と咎めという2つの機能があるとしている。依頼の例として次の7 a、咎めには7 bが挙げられている。

- 7 a. ちょっと 100円貸してくれないか。
- b. ちょっと その本返してよ。

たしかに、依頼と咎めという名前は妥当な命名かもしれない。「ちょっと」ということばは、聞き手には、何か“不利益”なこと、好ましくないことが述べられるという予想を導くことが多いからである。ただし、本稿では、7 aの「ちょっと」は副詞と考えるが、7 bは呼びかけ詞と見るのが妥当なのではないかと考える。そこに意味の上での「小」が含まれないからである。この点についても後に述べる。

さらに、グループ・ジャマシイ (1998) では、「ちょっと」の用法・用法として、次の5つが挙げられている。

- 8①程度 「今日はちょっと寒い」
- ②和らげ
- a. 程度の和らげ 「お出かけですか」
「ちょっと、そこまで」
- b. 語調の和らげ 「一日で仕上げるのは
ちょっと無理だ」
- c. いいさし 「このコピー機あいて
ますか」
「すいません、まだち
よっと…」
- ③プラス評価 「この本、ちょっと面
白いよ」
- ④「ちょっと・ない」の形で
- a. プラス評価 「こんなにおもしろい
映画は最近ちよっ
とない」
- b. 語調の和らげ 「田中先生の研究室は
どちらですか」
「ちょっとわかりませ
ん」
- ⑤よびかけ 「ちょっと、誰か来て」

ここで興味を引くのは②の「和らげ」という項であるが、例を見ると、「ちょっと、そこまで」というようなもので、本稿ではモダリティ副詞の用法と考えるものである。フィラー用法を指しているのではないようである。

さらにその後、談話における「ちょっと」の機能を検討したものに、岡本・斎藤 (2004) がある。岡本・斎藤は、次の6つの機能を挙げる。用例は、文中から拾ったものを挙げる。

- 9①依頼や、希求、指示行為の負担をやわら

- げる 「ちょっと待ってください」
- ②否定的内容の前置き
「それはちょっと難しいですね」
- ③断りを受けやすくする
「日曜日はちょっと…」 (言いさし)
- ④呼びかけ 「ちょっとすみません」
- ⑤とがめ 「ちょっと、高すぎやしま
せんか」
- ⑥間つなぎ (用例なし)

この区分は、これまでのところもっとも網羅的ではあるが、日本語教科書の分析をベースにしたもので、ややアドホックな分析であるように思われる。

岡本・斎藤 (2004) は、「ちょっと」のフィラー用法を指摘している点で、他と異なるが、例は挙げられていない。したがって、どのようなものを「間つなぎ」と呼んでいるかはわからない。

管見の範囲であるが、小寺 (2001) は、「間つなぎ」の例が示されている数少ないもののひとつである。ただし、この用例中の「ちょっと」は日本語学習者の発話から採られたもので、日本語母語話者の用法と同じマナイタの上で論ずることはむずかしいかもしれない。

10 cc 3 : はい 後 で んー シャワー と
か 浴びて んー ほん つくりて
あー ちょっと (間つなぎ) 何か
んー あった xxx の 本 とか あ
ー かばん に 要れて 後 準備
して 後 で あー タご飯 食べ
ます。 (p.85)

このように見てくると、これまでのところ、「ちょっと」に、フィラー用法があるということは指摘されてはいるものの、何をフィラーとするかはっきりしていないようであり、具体的

にはほとんど検討されていないようでもある。

以下、2節ではフィラー化以前の「ちょっと」の用法、3節ではフィラーとしての「ちょっと」の用法、および、程度副詞からフィラーに至る派生のプロセス、4節では2、3節の検討のまとめもかねて、程度副詞からフィラーまでの広がりかどのようなものかを見ることにしたい。

2 フィラー化以前の「ちょっと」

2.1 「ちょっと」の副詞としての性質

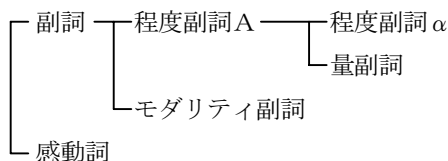
まず、フィラーに至るプロセスをたどるために、フィラー化以前の「ちょっと」の用法についてみることにしたい。

結論的にいえば、前節でもふれたように、「ちょっと」は、副詞、感動詞という2つの品詞性を持つ^{注4}。

副詞としては、指示副詞、様態副詞、程度副詞、陳述副詞という4つの下位区分^{注5}のうち、程度副詞、陳述副詞の2つの性質を持つ。

そして、程度副詞は、さらに、程度副詞と量副詞に分けることができる。図示すると次のようになる。用語が紛らわしいので、便宜的に、上位区分の程度副詞を程度副詞A、下位区分のものを程度副詞 α とする。

11. 「ちょっと」の持つ品詞性



まず、程度副詞Aとしての性質について見てみる。程度副詞Aは、まず、次の2つの観点で、量副詞と程度副詞 α に二分することができる^{注6}。

12 a. 動詞を修飾するか

b. 形容詞類を修飾するか

動詞を修飾するのは量副詞、形容詞類を修飾するのは程度副詞 α である。13 aのように、「__食べた」の__に入るのが量副詞、13 bのように「__暑い」の__に入るのが程度副詞 α である。

13 a. { たくさん・*とても } 食べた。

b. { *たくさん・とても } 暑い。

この12の観点で見ると、「ちょっと」は、動詞・形容詞どちらの修飾も可能であり、程度副詞 α と量副詞の両方の性質を持つことになる。

13 a'. ちょっと食べた。

b'. ちょっと暑い。

このような性質を持った副詞には、「ちょっと」以外には、「すこし」「多少」「かなり」「すごく」などがある。

この段階で、程度副詞Aは、次の3つのグループに分けられたことになる。第3のグループを、仮に、「量・程度副詞」と呼ぶことにすると、程度副詞Aは次のように区分される。

14. 程度副詞Aの下位区分

	動詞・形容詞		< 語例 >
	修飾	修飾	
量副詞	○	×	< いっぱい・たくさん >
程度副詞 α	×	○	< たいへん・とても・やや >
量・程度副詞	○	○	< ちょっと・少し・多少 ^{注7} ・かなり・すごく >

そしてさらに、量・程度副詞は、意味的な観点から、程度や量が「小」であることを表す

グループと、「大」を表わすグループに分けられる。「ちょっと」「少し」「多少」は「小」、「かなり」「すごく」は「大」のグループである。

そしてまた、さらに、「小」のグループは、「ほんの」「ごく」「もう」などの語の修飾を受けるかどうかで、2つに分けられる。「ちょっと」「少し」は「ごく」「ほんの」を受けることができるが、「多少」は可能ではない。

この段階で、量・程度副詞は次のように下位区分され、「ちょっと」と「少し」が同じ区分に入ることになる。^{注8}

15. 量・程度副詞の下位分類

程度や量の「大」を示すグループ

<かなり、すごく>

程度や量の「小」を示すグループ

「ほんの」「ごく」の修飾を受けない

<多少>

「ほんの」「ごく」の修飾を受ける

<ちょっと、少し>

2.2 「ちょっと」と「少し」の異同——程度副詞からモダリティ副詞へ

この段階での「ちょっと」と「少し」は、つまり程度副詞としての範囲では、統語的な面、意味的な面では大きな違いはなく、あえて違いを挙げるとすれば、文体的な違いということになるのではないかと思われる。国立国語研究所 ninjal での分布を調べると次のようになっており、傾向としては、「ちょっと」が会話文、「少し」が書きことばでより使われているという違いが見られる程度である。

16. 「ちょっと」と「少し」の国立国語研究所 ninjal での用例数の割合

	書籍—地の文	書籍—会話文
ちょっと	64%	36%

少し 87% 13%

このような似た性質を持つ2つの語が、違いを見せるようになるのは次のような例である。

17 a. { ちょっと・少し }, 散歩してきます。

b. 食後、{ ちょっと・少し } 運動してみてください。

18 a. 買い物のついでに、{ ちょっと・?少し }

友人の家に寄ってみた。

b. 朝、{ ちょっと・??少し } 駅の待合室の前を通ったら、人でいっぱいでした。

17の「ちょっと」は、「少し」と置き換えられるものであり、kotonoha^{注9}などでもその用例が確認できるものである。それに対して、18では、「少し」に置き換えるとやや不自然になる。

18aの「ちょっと友人の家に寄った」を例にとれば、ここでの「ちょっと」は「短時間、長居はしなかった」というような意味を感じさせるものであり、「小」の意味を持っているとも解されるが、それがさらに、「特に理由もなく、軽い気持ちで」というような意味へ広がっているようにも感じられる。「少し」に置き換えると、やや落ち着きが悪く感じられるのは、この後者の意味合い（「とくに理由もなく、軽い気持ちで」）を含むようになったからであろう。「少し」は、滞在時間などのコトガラ内の量や程度として捉えられるものに対しては使えるが、そうでないものには使いにくいという性質があるのではないかと思われる。「ちょっと寄る」というときの「ちょっと」は、量・程度ではあるが、心理的な量・程度であって、コトガラの物理的な量・程度ではない。ここに至って、「小」は、その内容を変化させていて、行為をする際の認識あるいは意図の「軽さ」という意味を表わすようになっていけると言えるのではないか。

この観察が妥当なら、18の「ちょっと」は、程度性を保ちながら、かつ、別の性質を持ち始めた用法であり、「少し」と分岐する、その分岐点にある用法と言えるのではないかと思われる。

秋田(2005)は、「ちょっと」について、

19. (「ちょっと」は)「偶然」「ついでに」「無意識に」などの発話意図を添えることができるのではないか。(p.78)

と述べているが、興味深い観察である。「偶然、ついでに、無意識に」という意味合いは、語用論的に生まれるものかもしれないが、少なくとも、物理的な量、程度を離れて、心理的なものへと変化しているという指摘は妥当であろう。また、フィルターとしての「ちょっと」の機能を考える場合に重要な点であるが、行為の評価が「軽」であるとは、まさに無意識に行われたものであり、特別な意図は持っていなかった、なぜそのような行為をしたか特に理由はない、という意味合いに通じる。18の「ちょっと」は、どうして「駅の待合室の前を通った」かわからないという、行為の注釈としての機能も持つようになっていくと見ることができよう。

2.3 モダリティ副詞としての「ちょっと」

このように、「ちょっと」は「少し」と異なる機能を持つことになるが、18の用法はまだ程度副詞との境界線上にあるとも言えるものであろう。が、ここで、認識についての評価をする用法を獲得したことが重要で、それが、次の20のような用法へと広がる道を開いたのではないかと思われる。つまり、命題内のコトガラ¹⁰の量・程度を示す用法から、命題外にあって、その行為全体への注釈をするような用法へと広がる可能性が生まれたということである。

- 20 a. ちょっと待って。
b. ちょっと無理だね。
c. ちょっとあなたに聞きたい。
d. ちょっとお訊ねします。
e. ちょっと歩こう。
f. ちょっとむずかしい。

20 a～fの例は、程度副詞「少し」との置き換えも可能である。コトガラの程度を示すという解釈も可能だからである。たとえば、20 a「ちょっと待って」は、「少し待って」と言うことも可能であろうし、「ちょっと」を「少しの間」と解釈することも無理ではない。

しかしその一方で、「ちょっと待って」には、「ちょっとふざけないでよ」というときの「ちょっと」と同じように、相手への行為要求にかかわる意味合いも含まれる。「ちょっと」を程度「小」と解釈することにそれほど意味がなくなっているとも言える。b～fの例について、いずれも同様である。

この20 a～fに共通しているのは、これらはいわゆる遂行文^{注10}としての性格を持つということである。「ちょっと」は、これらが果たす発話行為と関わりを持つようになっていくのである。

これが、モダリティとのかかわりを持つ「ちょっと」の出発点ではないかと思われる。それは、「少し」と置き換えられない用法へと広がっていく。

- 21 a. いやわたくしちょっと今忘れてしまいました。(MT f)
b. あのですね、(1:はい) 実はその一ゴミの件なんですけれども(1:はい) あのこちらではどちらかに、あの出したらいいのか(1:あ) え、ちょっと あの一分からないもんで。(CJf)

- c. で一、学校にしばらく来てなかったの
で、(1:ええ) ちょっと、一番新しい
のと言われ、て、ると、(1:ああ)と困
るんーですが。(NFm)
- d. じゃちょっともう一つあのーロールブ
レイをしていただきたいと思いますけれ
ども。(MTf)
- e. それで戻るの、ちょっと予定してな
いですね。(KJF)
- f. ちょっとやめろよ。

21a～fの「ちょっと」は、「少し」との置き
換えが不自然になる。「忘れる」「わからない」
などについては、そもそも程度というものを想
定することがむずかしい。

モダリティとは、中右(1980)の規定に従え
ば、話し手の発話時の、命題内容あるいは聞き
手への心的な姿勢ということになるが、中右は、
モダリティ副詞(中右の用語では「命題外副詞」)
を、価値判断、真偽判断、発話行為、領域指定、
接続の5つに区分している。この区分から言え
ば、「ちょっと」は発話行為の副詞ということに
なると思われる。

21a～fの例は、「ちょっと」と共起する発話
行為の網羅を目的としたものではないが、HCSJ
などのコーパスの中で比較的多く見られた用法
である。自分の行為の宣言をするタイプのもの、
相手へ命令ないし否定命令、誘い、といったも
のである。宣言という用語が妥当かどうかわか
らないが、ここでは相手への拒否や働きかけな
どの行為を宣言するという意味で使う。

22. 宣言 21a「忘れました」、21b「わから
ない」、21c「困ります」、21e「～
ない」、20b「無理だ」、20d「お
尋ねします」依頼あるいは指示、
20c「聞きたい」、21d「～してい

ただきたい」

- 命令 20a「待て」、21f「やめろ」
誘い 20h「歩こう」

程度副詞からモダリティ副詞へと広がる過程
には、「ちょっと」の「小」という意味がかかわ
っていると述べたが、木村(1987)に指摘され
ているように(4参照)、対人的な要求をできる
だけ小さくするという、語用論的な要請が背景
にあったかもしれない。また、このように遂行
文に「小」を示す副詞が現れる表現は、他言語
でも見られるところであり^{註11}、対人要求と程度
「小」副詞の共起は言語を超えたものかもしれ
ない。「小」系の程度副詞がこのようにモダリ
ティ副詞として成立するのに対して、「大」系の程
度副詞にはモダリティ副詞がないのは、ひとつ
には、このような語用論的な機能の差があるの
かもしれない。

2.4 モダリティ副詞としての意味——発話 行為の何を注釈するか

このように、相手への要求を小さくする、あ
るいは、和らげるものとして「ちょっと」が使
われたとする想定はそれほど不自然ではないだ
ろうが、モダリティ副詞としての「ちょっと」
の和らげとは、具体的には何をどのように和ら
げるのだろうか。「ちょっと」はどのような意味
を持つのだろうか。このことを考えてみよう。

- 21a. いやわたくしちょっと今忘れてしま
まして。
a'. いやわたくし φ 今忘れてしま
まして。

この2つを比べてみると、21a'は、「忘れて
しまった」という事実を述べるだけである。そ
れに対して、21aは、「ちょっと」があることに

よって、単に「忘れてしまった」という事実を述べるだけでなく、「思い出せるはずなのに思い出せない」というような心的過程の存在を暗示し、それと同時に、そう言及することによって、それ以上の説明を省略するという姿勢を表示することになっているように思われる。

次の21cも同様である。21cが、「困る」ことの原因は「学校に来ていなかった」ことであるということで、直接的な関係になっているのに対して、21cは、その他の事情もいろいろ勘案されるが、それは説明が難しい、省略したい、というような姿勢を暗示するもの感じられる。

21c. 学校にしばらく来ていなかったので、
ちよつと、一番新しいのと言われると困るんーですが。

c. 学校にしばらく来ていなかったので、
φ 一番新しいのと言われると困るんーですが。

この「説明するほどのことではない」「説明が難しい」というような意味合いは、これも語用論的に形成されたものかもしれないが、「ちよつと」に共通してみられる性格のように思われる。対人行為の「和らげ」であると同時に、それにまつわる事情説明を省略することの表明にもなっているのではないかとと思われるのである。

「それはちよつと…」「ちよつとそこまで」という言い方が「ちよつと」を論ずる際によく取り上げられるが、この「ちよつと」は、「程度の和らげ」（グループジャマシー）というように、程度副詞として見るのではなく、説明の困難さとそれに伴う説明省略の表明として見る方が、この用法の実情に合っているように思う。

2.5 感動詞^{注12}としての「ちよつと」

「ちよつと」は、さらに感動詞としての用法

を持つ。ここでは、呼びかけと、非難という2つの用法を見てみる。

まず、呼びかけ表現であるが、モダリティ副詞から呼びかけ詞へという広がりには、「ちよつと」が、発話行為に先立つ語として使われたこと、つまり、発話行為の予告として機能するところから生まれたのではないと思われる。

呼びかけ表現という言い方が適切かどうかかわからないが、「ちよつと」は、具体的には、相手の注意を自分の求める方向へ向けさせるための表現として機能する。

相手の注意を引こうとすることは、会話のチャンネルが開かれていない状態にあって、チャンネルを開こうという意志の表現に通じる。例23はこの用法に当たる。

23. 「すみません。あの一、ちよつと」気の強い晴子が、小声で言った。(縦山2003)^{注13}

24. 茉莉と二人でしまる寸前の銭湯に行き、ついでに終夜営業の付属コインランドリーで洗濯をすませた帰りだから、時刻はもうほとんど真夜中に近かったはずだ。

「ちよつと、洋ちゃん。あれは何？」(久間1993)^{注14}

それに対して、24の例は、話者以外の、話者とは別の対象あるいはモノゴトへ注意を求めるものである。23ならば「もしもし」「あの一」と置き換えることが可能であろうが、24では、置き換えはできない。「ちよつと」は、だから、注意は喚起するが、どこに注意を向けるかについては、何も言っていないことになる。これは、「ちよつと」が呼応する発話行為が、とくに特定の指向を持った行為ではないことを示すものだろう。

感動詞としてのもう一つの用法は、咎め(周1994)ないしは非難を表現するものである。単

に注意を喚起するだけでなく、その上に対人的な行為性を持つところが、単なる呼びかけと異なるところである。

25. わざわざそこまでいってくれなくってもいいのにつ。「ちょっと。なにふたりでこそこそしてんの？」(沢井 1990) 注¹⁵
26. ミチルは、学会で使うスライドを選びながら、クスリと笑った。「ちょっと。人の学会ネタで、伊月君がそこまで憂鬱になることはないでしょ」(榎野 2002) 注¹⁵

この例では、「ちょっと」と聞いただけで、非難を感じさせる。「ちょっと」は、上の 21、22 で見たように、拒否、禁止など、否定的なニュアンスのある発話行為との共起性が強い。上下関係が意識されるころでは、下から上に「ちょっと」は使いにくいのも、「ちょっと」の非難性によると思われる。また、感謝などの発話行為とは共起しにくいのも、この性格の裏返しだろう。

なお、蛇足ながら付け加えれば、「すみません」は、注意の方向を指定しないという点で「ちょっと」と似ているが、非難の意味を持たない点で異なる。「すみません」は、依頼、詫びなどの発話行為と共起することが多く、呼びかけにもその性格が保持されていると思われる。呼びかけ詞の性格は、共起するモダリティと対応していることになる。

3 フィラーとしての「ちょっと」

3.1 会話に現れる「ちょっと」の特徴

次に、フィラーとしての「ちょっと」について考える。この稿では、文あるいは談話を形作るための成分としての位置づけを持たないということ、フィラーと認めるためのひとつの基準としているが、この基準から見てフィラーと

考えられるものが、次の「ちょっと」である。

- 27 1 : (….) あのー、失礼ですけどご主人様は、どのようなその、例えば、ある、典型的な一日ですと、(2 : ええ) 何時頃お宅をお出になって何時頃お帰りになられるんでしょう？
- 2 : あ、そうですね、えー、昨日の場合ですと、(1 : はい) 朝、7時半頃出まして、会社は8時半からー (1 : はあー) なんですね。それで、主人はちょっと、こう設計関係の仕事なものですから、(1 : はい、はい、はい) 今締切り間近で、(1 : はい) 大体次の日に、帰ってまいります。(IT f) (例 1 の再掲)

この例の「ちょっと」が、「主人は設計関係なものですから」あるいは「大体次の日に帰ってまいります」を修飾するとは考えにくい。文あるいは談話という形式の中での役割を考えても答えは見出せない。

前節で、モダリティ副詞としての「ちょっと」は、事情説明の省略を表現しかる表明するという機能を持つものと考えた。フィラー用法をみたとき、この“説明がしにくい” “説明がやっかいだ”、さらには、“手間をかけて説明するほどのものではない”、という認識を受け継いでいると考えれば、多くの用例の説明がつくように思われる。27 では、話し手は「主人の仕事」について説明しようと考えたのであろうが、どのような表現が適切か、どの程度、どのように説明すればいいかというような迷いがあったかもしれない。その心理はもちろんわからないが、「ちょっと」はそのような模索の末に、「設計関係の仕事なものですから」という表現が選ばれたことを示すのではないと思われる。

さらに例を挙げれば次のようなものがある。

- 28 1: ああー、(2:あの一)一番大きな、
ん、そのショックはどのような、事であ
らっしゃいましたか？
2: そうですねえ。まず、帰ってきた、
次の日に、あの一、ちょっと地下
鉄一。(1:うん)ていうか電車に乗
る事があったんですね。(1:はい)
(TN f)
- 29 1: なるほどね。あー。でも苦しかった
ことって例えばどんな。
2: えと、ホストファミリーとのこと
なんですけど(1:うん)ホストファミ
リリーの中に問題があって、それで、
うーん、ちょっと、家族の中の問題一
で、(1:うん)家族が泣いてるのを見
たりして、自分がこう、ゆう全然関
係ない人がそういう問題の中に入って、
いってしまったり、そばにいてしま
っても(1:うん)いいのかなって
いう、ありましたね。
1: あーそれは あるでしょうねー。
そうですか。(TS f 鈴)
- 30 1: ああそうですかー。じゃ、(2:一
日)田中さんは一週間どのくらい。
2: 今のところちょっとあの一、研修
生なんで、(1:はい)週に二回なん
ですけど、(1:はい)これから週に、
自分の好きなだけ入れれるし、(1:
はい)あと、時間も自分の好きなだけ
一なんで、(1:うん)しんどいなあ
とか思った日には二時間とか。
1: ああそうですか。(RTm)(例2再掲)

28の「ちょっと」は「地下鉄に乗る」に至った事情説明を省略したい、あるいは、説明する

ほどのものではない、というような心理的背景を持つものと考えられる。

29の「ちょっと」も整合的な説明はむしろかしいが、というような姿勢と関わりがあるだろう。

30の「ちょっと」も、「研修生」というものの性格、「研修生」になっている事情というようなものの説明のしにくさというものを暗示することで、その説明を省こうとする姿勢を背景に持つものと思われる。

因みに、HCSJ というコーパスは、インタビューを集めたものであるが、インタビューされる人は、自身の考えや経験などの説明を求められることが多い。そのため、その背景説明が必要なことも多くなるが、常に適当な説明が可能なわけではない。フィルターとしての「ちょっと」がHCSJで多く見られたのは、そのような事情によると思われる。

ここでの用例の観察が妥当だとすれば、フィルターとしての「ちょっと」は、モダリティ副詞としての用法から派生したものであり、それは、「まあ」や「もう」などのモダリティ副詞がフィルター化すると同じく、副詞としての意味合いを継承しつつ、呼応するモダリティを欠く形になることによって成立した用法と見られよう。^{註17}

5 まとめ

本稿では、フィルターとしての「ちょっと」がどのような過程で派生し、またどのような機能を持つか、その機能は程度副詞やモダリティ副詞とどのようなつながりを持つかについて検討してきた。

議論を簡単にまとめると、まず、「ちょっと」は程度副詞として程度と量の「小」を示す2つの用法を持つものであり、「少し」と同じ類に区分されるものであった。しかし、「少し」が命題内のコトガラ量の量や程度の表示に使われるという制約があったのに対して、「ちょっと」は、「ち

よっと寄ってみた」の「ちょっと」など、行為の軽さというような心理的な度合いの用法を持つところから、「ちょっと待って」というような対人的行為のやわらかな表現と共起するようになった。これが、「ちょっとやめろよ」のような、程度性を持たない、遂行文などを導く表現へとつながった。程度副詞として「小」を表すという性質は、モダリティ副詞になる契機となったわけであるが、モダリティ副詞としては行為の軽さ、さらには、説明するほどのものではないというような、行為についての評価的意味合いを持つようになり、それがさらに、当の発話行為の意図や、背景などの説明を省略する際の注釈表現としての機能を持つようになると考えた。

感動詞としては、呼びかけ、非難の2つの用法を認めたが、それも、「ちょっと」との共起性の高い、否定的、あるいは対人要求的な発話行為とのつながりがあるために派生したものであろう。

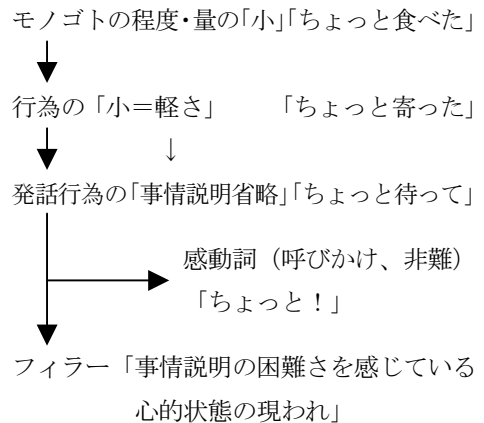
ここでは、この評価的なモダリティ副詞の用法が基盤となって、フィラーとしての用法が成立したと考えた。フィラーとしての「ちょっと」の中心的な性格は、事情説明などが手間取りそうである、あるいは説明がいささかやっかいだというような評価的な心的状態の現われではないかと思われる。そのような心的状態を表示することによって、説明の省略を可能にしようとしているのである。

フィラーとしての「ちょっと」がこのような性格を持つのは、繰り返しになるが、「ちょっとやめろ」「ちょっと忘れた」という表現の副詞「ちょっと」が、なんらかの理由や事情があるために「やめろ」「忘れた」と言っているということを暗示しつつ、説明を回避する機能を持ったことに起源をもつ。これが、構文的な位置づけは不明確なままに文に現れ、発話全体の基調を示

すことになったのが、フィラーとしての「ちょっと」である。構文的な位置づけが不安定でありながら出現するのは、モダリティ副詞としての、発話全体にかかわるといった性質を受け継いでいるからだと思われる。つまり、呼応が予想されながら、その呼応先が統語的に明示されない形で現れるものがフィラーの一つのタイプであり、「ちょっと」は、「まあ」「もう」などの副詞系フィラーと派生の事情を共有している。

以上の広がりを図式的に示すと次のようになる。

31. 「ちょっと」の用法の広がり



フィラーとしての「ちょっと」を以上のように考えたが、この議論が妥当かどうかを探るためには、2節で触れたように他言語に見られる「小」表示が、その言語でもフィラー化しているかどうかを調査するなど、傍証を得る必要があると思われる。また、「ちょっと」の副詞の中で「大」を表わす用法があるが、それについては触れることができなかった。「ちょっと」の用法全体を見直して、議論を深める必要もある。これも「今後の課題」としたい。

<参考文献>

- 秋田恵美子 (2005) 「現代日本語の『ちょっと』について」『創価大学留学生別科紀要』17 : 72-89
- 岡本佐智子・斎藤シゲミ (2004) 「日本語副詞「ちょっと」における多義性と機能」北海道文教大学論集 5 : 65-76
- 木村英樹 (1987) 「依頼表現の日中対照」『日本語学』6 (10)、明治書院、pp.58-66
- 工藤浩 (1984) 「程度副詞をめぐって」(渡辺実編『副用語の研究』明治書院)
- グループジャマシイ (1996) 『日本語文型辞典』くろしお出版
- 国立国語研究所 (1991) 『副詞の意味と用法』文化庁
- 小寺里香 (2001) 「初級～中級学習者の発話にみられる副詞の使用について」『岐阜大学留学生センター紀要 2000』76-89
- 周国龍 (1994) 「要求行為における『ちょっと～』の機能に関する一考察」『名古屋大学人文科学研究』23号 名古屋大学大学院文学研究科
- 中右実 (1980) 「文副詞の比較」国広哲弥編『日英語比較講座第2巻文法』大修館書店
- 渡辺実 (2001) 『さすが！日本語』ちくま書房

<注>

- (…)、この部分に省略があることを示す。
- 見やすくするために、以下、用例中のすべての「ちょっと」を太字・下線付きにする。原文で太字・下線がある場合には、その旨を注記するが、それ以外は、すべて筆者による。
- 用例の最後に (IT f) などの記号が付されているものは、「インタビュー形式による日本語会話データベース」(北九州市立大学上村研究室)からのデータで、記号は、データに付された名称である。なお、本文ではHCSJと略記した。
- 「ちょっと」「少し」は、「ちょっと／少しの間」など「の」を介して名詞の修飾成分となる、「ちょっと／少しは」など取立て詞を後続させるなど、名詞としての性質を持つことから、工藤 (1984) のように、数量名詞として扱う立場もあると思われるが、格助詞が付けられないなど、名詞としての典型性が弱いことから、あえて、数量名詞という区分は立てなかった。この点の議論は別稿に譲りたい。
- 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』東京堂出版などによる。
- 工藤 (1984) などによる。
- 渡辺 (2001) は、「多少」について、形容詞類しか修飾できないとしている。したがって、程度副詞とい

- うことにされているが、「毎日、多少は運動する」「昨日は、多少仕事をした」など、動詞と共起する用法は多く存在する。国立国語研究所 ninjal によれば、「多少+動詞」は 1022 件、一方、「多少+形容詞」は 174 件で、用例の多さから見ても、「多少」が動詞と共起しないとするのは無理があるように思われる。また、反対に、「多少+形容詞」の場合、「多少高い」「多少悪い」が、全用例のほぼ 25% を占めており、共起する形容詞は限定的であるようにも思われる。
- さらに、「～のN」、たとえば「ちょっとの間」のように「の」を介して名詞を修飾することもできる。「かなり」などは「かなりな量」というように「な」をとり、形容動詞型でもあるが、「ちょっと」「少し」は名詞として扱われていることになり、「たくさん」「いっぱい」とともに、量副詞とされたものは、名詞の性質を持つとも言える。
 - また、「あとちょっと／少し」などの接辞的な用法もある。この点でも「2時間ちょっとの距離」は可能だが、「2時間少しの距離」はやや不自然であり、違いが見られる。が、この稿ではこれらの問題にはこれ以上踏み込まず、問題の指摘にとどめる。
国立国語研究所
 - 「発語内行為を行うために用いられる文」(『応用言語学事典』p.206)
 - 英語なら“Wait a moment.”, 仏語なら“Un peu attendez.” など。
 - 感動詞という用語が妥当かは疑問であり、文相当詞などと呼びたいところだが、ここでは慣例に従う。
 - ninjal (縦山風子著 『アゲイン』, 2003)
 - ninjal (久間十義著 『海で三番目についてもの』, 1993)
 - ninjal (沢井いづみ作; さえぐさじゅん絵 『課外授業はおまじないゲーム』, 1990)
 - ninjal (榎野道流著 『隻手の声』, 2002)
 - なお、HCSJ に現れたフィラーとしての「ちょっと」の多くは以上のような用法のものだったが、タイプの異なるものがなかったわけではない。次のようなものである。
1 2 : そうですね、まずあの主人の、里の方に (1 : ああー) あのお盆は、帰りまして、あとそれとは別に、まあ子供がいない気楽さで、(1 : うん) あの前日も ちょっと ヨーロッパの方に、(1 : うーん) 10 日程行ってきました。(1 : うん) 一年に一回ぐらいはどこか、(1 : うん) 一回か二回は、(1 : うん) 旅行するように。
(IT f)
 - 2 2 : えーと、夏一休みが8月の最後の週になっ

てしまうものですから、(1:ええ。)うーん、
今ちょっと考えてるんですけどね、島根に祖母
がいるんですけど(1:ええ。)その祖母
の家にちょっと友達と行って、まあのんびりし
ようかなと。(KNm)

これらの「ちょっと」が、事情説明系のもので解する
ことも可能だが、程度・量の「小」という意味の名残を
感じさせるところもあるものである。

*なお、この研究は独立行政法人日本学術振興会の科学
研究補助金(課題番号 22520520)を得て行われた。